

# キャリア教育としての中大連携による教員養成課程の学生の学び —中学生の学校訪問の企画・運営を振り返る学生らの語りから—

郡 司 菜津美

## 1. 問題と目的

平成29年・30年度に改訂された学習指導要領には、「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」が明記されており、児童生徒たちのキャリア発達を支えていくことが教員の役割であることが示されている。これまで、児童生徒の将来を見据えたより良い指導については多様な研究知見が集積されつつあり、キャリア教育の一環である「高大連携」に関してはプログラム開発が盛んに行われている。

一方で、「中大連携」に関してはほとんど研究されていない実態がある。日本の高等学校への進学率は98.7%であり、義務教育段階を終えた子供達のほとんどは高等学校への進学を選択する。さらに84%はその先の高等教育機関へと進学するキャリアパスを踏むことが明らかになっていることから（文部科学省, 2023）、中学生の段階で高等教育機関に進学するという選択を自立的・主体的に検討させる機会を提供することは、「将来とのつながりを見通し」させることであるといえるだろう。文部科学省(2023)が、中学生の発達課題の中で「進路計画の立案と暫定的選択」「生き方や進路に関する現実的探索」が重要であると述べていることから、中大連携に関する知見を集積する意義は大きい。そこで本研究では、この中大連携に着目する。

中大連携に関する研究においては、世代間交流の効果に着目したもの（上野・永瀬, 2017; 中澤, 2010）、中学生の学習カリキュラムに着目したもの（緩利ら, 2009; 福嶋, 2020; 井上・濱田, 2022）、中大連携の手法に着目したもの（大内, 2021; 大内, 2022; 大内, 2023）、中学生や大学生の学びに着目したもの（河上・鈴木, 2010; 大内, 2020）に関する知見が集積されつつあるが、総じてそれらの蓄積は十分であるとはいえず、特に、将来のキャリア教育を担う教員養成課程の学生が中大連携によってどのような学びを得

られるのか、その点に着目した研究はほとんど見当たらない。そこで本研究では、中部地方の中学校が実施したキャリア教育としての大学訪問の機会をフィールドに、関東圏内私立大学の教職課程を履修する大学生が、中大連携の実践によってどのような学びを得たと認識しているのか、企画・運営の振り返りの語りから示すことで、中大連携が教員養成にもたらす可能性について明らかにすることを目的とする。本研究が、中大連携に関する知見の集積に寄与することを期待したい。

2. 方法

2-1. 中大連携実施の背景と倫理的配慮

中大連携実施の背景の詳細は、太田・郡司・助川(2024)を参照されたい。中部地方のα中学校3年生が、修学旅行の際にキャリア教育の一環として筆者の所属する大学に来校することとなり、筆者が所属するコースで受け入れることとなった。中学生の当日参加人数は30名（全員男子）であった。

本研究の実施に際しては、本活動が終了した後、活動の振り返りとしての事後インタビューを実施したい旨を参加学生らに口頭で説明し、了承を得た。インタビューへの回答の有無、および内容については成績評価とは無関係であること、インタビューの内容は匿名化されること、学生達に一切の不利益がないことを伝え、かれらの同意を得た上で実施した。

2-2. 参加学生と活動の流れ

参加した学生は、表1に示した通り、教員養成系課程の学部4年生7名（男性5名、女性2名）と3年生5名（女性4名、男性1名）の計12名であった。全員、筆者（以下、教員）のゼミに所属する学生である。本実践はゼミ活動の一環として行われた。

表1 参加学生と活動の流れ

活動日	参加学生												
	学年	4年生						3年生					
	学生記号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
	性別	男性	男性	女性	男性	男性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	男性
	取得予定資格	中高社会	なし	養護教諭	中高社会	中学社会	中高社会	養護教諭	養護教諭	養護教諭	養護教諭	養護教諭	社会教育士
	準備での役割／活動内容	リーダー 全体司会	学内探検	インプロ	チラシ 学内探検	学内探検	インプロ	学内探検	学内探検	学内探検	チラシ 学内探検	インプロ	インプロ
4月11日	顔合わせ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4月18日	概要説明	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5月23日	準備日①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5月30日	準備日②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6月3日	前日準備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6月4日	リハーサル・本番	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6月9日	事後インタビュー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6月13日	事後インタビュー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

2024年4月11日に、4年生と3年生が顔合わせを行い、ゼミ活動が始まった。4月18日には本実践の概要を教員が説明し、活動のテーマが「共同」であること、3つの活動チーム（学内探検・インプロゲーム・チラシの作成）に別れて準備を行うこと、6月4日の当日には教育実習期間中で参加できない学生D・E・F・Gを含めて全員で準備を行うこと、当日参加可能である4年生のうち教育実習を直前に控えた学生Aをリーダーとすること、の4点を伝えた。学生らは活動に参加することに同意し、企画・運営を楽しみにしている様子であった。

5月23日には3つのチームに分かれて準備を行った。中学校側から依頼されていた大学案内に関する①チラシを作成するチーム、②学内探検を準備するチーム、③インプロゲームを準備するチームであった。中学生に「大学とはどんなところであるか」を理解してもらうため、②については物理的環境を紹介する活動を、③については大学のゼミではどんなことを学んでいるのかを体験的に学習させる活動を意図し、教員が学生らにそれぞれの枠組みを提案した。それぞれのチームメンバーは学生達自身で決定した。

活動全体のテーマを「共同」としたため、②学内探検では、中学生のそれぞれのグループが分かれて活動することの必然性を考慮したものを学生が提案し、クロスワードパズルを埋めるキーワードをそれぞれのグループが集め、全員が集合することで完成するという工夫を仕掛けていた。③インプロゲームは即興で共同する遊び（ロブマン・ルンドクウイスト、2007/2016）であり、その活動を通して他者と関わることの難しさや面白さ、大切さを体験するものであり、それぞれのゲームによってどのような体験ができるかを考慮して、どのゲームを実施するかを学生らが選択していた。

5月30日には2つのチーム（②学内探検・③インプロゲーム）に分かれて準備を行った。①チラシ作成のグループはその役割を終えたためである。②学内探検チームは、どのようなクロスワードパズルを実施するのか具体的な質問と回答を作成し、必要な道具を準備していた。作成にかかる教材教具は教員が提供した。③インプロゲームチームは、活動の指示とゲーム実施によってどのようなことを体験して欲しかったのかを伝える原稿作成をした。必要なタイミングで教員が助言した。

6月3日の前日準備では②学内探検のクロスワードパズルを模造紙や画用紙で作成した。

6月4日のリハーサル・本番では、12時半に活動場所である大講堂に集合し、活動の準備を行った。13時から、教員の大学院の講義を受講する

中国人の留学生 5 名（大学院 2 年生 1 名・1 年生 4 名）を模擬的に訪問者として迎え、本番と同様の流れでリハーサルを行った。15時半からは中学生が来校し始め、4つのチームに分かれて学内探検を行い、16時半に大講堂に集合した。その後 2 人組・チームごと・参加者全員で集まってインプロゲームを行った。17時50分に集合写真を撮影し、18時には解散した。本番の流れ及び活動の詳細は表 2 の通りである。

表 2 本番の流れと活動の詳細

時間	活動内容	主担当	備考
15:30	学内探検	各チーム学生	5つの班がそれぞれ到着。名札の作成と自己紹介、その後学内探検
		1：学生A・学生I	中学生1班6名
		2：学生B・学生K	中学生2班7名
		3：学生H・学生J	中学生3・4班合同で1チーム（11人）
		4：学生C・学生L	中学生5班6名が遅れて到着
16:15			
16:30		学生H	大講堂集合
			クロスワードパズル完成
16:40	インプロゲーム	司会：学生A	ゲーム説明⇒実施⇒振り返り
16:45	①ペンのダンス	説明と解説：学生K	2人組になって活動するもの。ファシリテーターの指示通りに1本のペンを2人で無言で共同しながら操作する遊び。言葉の使用ができないため、指先の力を調整しながらお互いの意図を汲み取ろうと工夫する。こうした「自分一人だけでは成立しない」ことが共同の基本であることを伝える意図があった。
16:55	②ワンワード	説明と解説：学生J	班ごとに活動するもの。1人1文節ずつつなげて1人の人間のように話す遊び。前の人が話したことを聞いていないと繋げられないので、互いに何を話したのかを聞こうとする。「相手の話を聞いてそれをつなげていく」ことがお互いに気持ちよく共同する基本であるということ伝える意図があった。
17:20	③イルカの調教	説明と解説：学生C	参加者全員で活動するもの。1人のイルカ役を外に出し、特定の動きをみんなで相談してお題とする。イルカ役を呼び戻し、「リン」というセリフだけでみんなで応援してお題の動きを当ててもらう遊び。普段クラスで発表する時など、「聞き手」側のパフォーマンスが大切であり、発表者（イルカ役）のパフォーマンスは聞き手側に影響されること、共同の場づくりはみんなで行うものであることを伝える意図があった。
17:50	集合写真		お土産として大学案内パンフレットと大講堂のメモパッドと共に
18:00	見送り		中学生は大型バスで次の活動場所へ移動

2-3. 参加学生への事後インタビュー

2024年 6 月 13 日（木）14:00 ～ 14:40に事後インタビューを集団で行った。インタビュー対象学生 9 名（当日参加 6 名、準備のみ参加 3 名）は表 1 に示した通りである。実施場所は、関東圏内私立大学の演習室であった。学生 A はインタビュー実施日が教育実習期間中であることを事前にわかっていたため、6 月 9 日（日）11:30 ～ 11:50にオンラインで個別にインタビューを行った。インタビューは合計 10 名に実施した。

インタビューの質問項目は、①事前準備・リハーサルと②本番のそれぞれ

について、(1)楽しかったこと・頑張ったこと、(2)不安だったこと・困ったこと、(3)教員として気づいたこと、の3点であった。6月13日の集団インタビュー（6名）では、①と②のそれぞれについて5分程度ずつ回答のための準備時間を設定し、A3用紙に話すことをまとめさせた。

6月4日当日は教育実習期間中だったために参加しなかった学生3名に対しては、当日までの準備には参加したため、当日参加した学生たちのインタビュー後に、「準備に参加したことと仲間の話を踏まえて感想を聞かせてほしい」と伝え、それぞれ2分程度の感想を話した。インタビュー実施の際には学生達の同意を得た上で記録のために録音した。

### 3. 結果

#### 3-1. 結果の処理

録音データを逐語化し、コーディングした。その過程で、前置き表現としての「なんか」「あの」「その」といった単語は削除した。6月4日の当日に参加した7名のデータと、準備のみに参加した3名のデータを分けて分析した。

#### 3-2. 結果

##### 3-2-1. 楽しかったこと・頑張ったことについて

学生達の語りは次の4点にまとまった。1-①「ゼミ生同士の協力」1-②「中学生との交流」1-③「対象年齢に合致させる工夫」1-④「言葉かけ」である。

1-①「ゼミ生同士の協力」については、学生A・H・I・J・K・Lが語った。以下にその具体を示す。

学生A「3年生とは、ゼミ内でしか関わってなかったんで。ゼミ終わったらバイバーイみたいな感じだったんで。事前準備で一緒に対応するってことで、この会のあのα中の子話し合い以外にも、**いろんな話？ゼミ旅行誰とりまとめんの？みたいな。去年は学生Eとか学生Dがやってくれたけど、みたいな。そういう話もできましたし。**」「元々模造紙にクロスワード書くっていう予定もなかったんですけど、3年生が、こうした方が、でっかく書いた方がいいんじゃないとか言ってくれたりして、当日がより良いものになるために、**みんなで案を出しながら、作り上げていったこと**がすごい頑張ったことだし、楽しかったことなのかなっていうのを思います。」

学生H「事前準備は、中学生に楽しんでもらうためにはどうしたらいい

いかっていうのを結構みんなで話し合いながら企画とか。準備が、その一つのことをできたのがすごい楽しかった」

学生 I 「4年生とかかわるっていうのが本当に長かった。その日は。ずっと長くまで残ってやってたから結構、こうした方がいいんじゃないとか、色々言ってくださったのでなんだろう・・・本当に中学生のためにこうした方がいいっていうのを、自分が考えられてなかったところも言ってくれたりとかして、勉強っていうか・・・すごい、いろんな学べたっていうか、楽しかったなって思います」

学生 J 「ゼミのみんなで一つのことを考えることが初めてだったので  
すごい『これがゼミかな』っていう体験できたのが楽しかった」

学生 K 「自分たちで一つの企画を作り上げるためにアイデアをいっ  
ぱいみんなで出す時間が楽しかった」

学生 L 「ゼミの人たちと協力しながら一つのこと作るのって面白い  
なって思いました」

1-②「中学生との交流」については、学生 A・C・H・I・J・K・L が語った。以下にその具体を示す。

学生 A 「すごい中学生たちが、自分たちが作ったものに対して笑って  
くれてたりとかふざけて遊んでくれたりとかしたことがやっぱりすごい教員としてもやりがいの感じられるところなのかなって  
いうのは思います」

学生 C 「クロスワードの質問を積極的に参加してくれて、その質問を  
してくれたり、そこからちょっと話が広がったりして、すごい  
楽しかった」

学生 H 「色んな子とお話しできて、関わってっていうのができたのが  
すごい楽しかったです。」

学生 I 「ゲーム中とかも、ペンのダンス、がうまくいかなかったときに、  
「うわ、やば、やらかした」みたいな感じで落としちゃった時  
とかも、「やば」とか言いながらもみんな楽しんでくれてるなっ  
ていう、そういう反応を見るのがすごい楽しかったです。」

学生 J 「修学旅行でここ行っただとか、これからここいくんだーとか。  
日常会話っていうんですかね。初めて出会ったのに、仲良くな  
れたのがすごい楽しかったし、嬉しかった。あとやってる時に

笑顔が見れたことがすごい良かったな一って思いました。」「静かそうな子とかはそんなにわ一っとはならないですけど、ニソニソみたいな。（中略）ちょっと笑ってるな一ってのは見れた。そういう子ほどあんまり笑わないのに笑ってる姿を見るとすごい嬉しかったし、良かった一なって思います。」

学生K「最後にみんながバスの中から手を振ってくれてたことがすごい嬉しくて、あぁ楽しんでくれたんだなってすごい良かったです。」

学生L「楽しかったことは、中学生と楽しく話せたこととか」

1-③「対象年齢に合致させる工夫」については、学生J・K・Lが語った。以下にその具体を示す。

学生J「適当にいうのはできても、ちゃんと話さなきゃいけないからまとめを言ったり、こういう遊びだからこういうことがわかるんだよっていうのを頑張りました」

学生K「ペンのダンスとかって、正直簡単じゃないですか。私たちの代だと。だからそういうのも、でも、中学生はちょっと難しいかもしれないとか」

学生L「楽しかったことは、学内案内のクロスワードを考えたこと。中学生の立場になったり」「なるべく簡単なワードとか人の名前とか、明らかに答えがあるもの？とかにしました」

1-④「言葉かけ」については、学生A・Cが語った。以下にその具体を示す。

学生A「すごい静かな子がいて。ずっとあんまり喋らないような子だったんで、そういう、こう見つけて積極的に話しかけに行ったりとか、トイレ行きたかったんですよ、多分。Mくんが一人で。それで行ってる時に「なんかどう？」みたいな話しかけたりとか、あんまり内気な子には積極的に話しかけてたのが頑張ったことかな」

学生C「頑張ったことは、振り返りをしているときにちょっと黙っちゃう子とかがいたんで、どうだった？って積極的に話しかけにいったことです」

3-2-2. 不安だったこと・困ったこと

学生達の語りは次の5点にまとまった。2-①「理解・動機づけへの配慮」

2-②「中学生への配慮」2-③「準備不足」2-④「不測の事態・スケジュール管理」2-⑤「ゼミ生との共同」である。

2-①「理解・動機づけへの配慮」については、学生C・H・I・J・K・Lが語った。以下にその具体を示す。

学生C「ゲームの説明がうまく伝わるかなあって、初めてやるゲームだったと思うので。中学生と仲良くなれるか、とか、歳の差とか、あんまり接したことがない、なかったので、ちょっと不安でした。」「ワンワードの振り返りの時に、私がどうだった？って話しかけたら、ペンのダンスが難しかったって言われて。ああ、今はワンワードの振り返りの時間だけど、ペンのダンスのことを話してくれたので、今は何をやってるのか、班の中でちょっと話しかけて、あの、言ってあげたらよかったなあって。」

学生H「結構前日の準備をずっと残ってやってて、その・・・学内探検？のときに中学生が飽きないように。説明をするにはどういう内容がいいかっていうのを、結構ずっと考えてたのが、個人的にがん・・・みんなで頑張ったなっていうふうに思います。」

学生I「学内探検で、飽きずに説明するとかっていうのが難しいなと思って。ポイントポイントははなしてても、うまく繋がられるかなみたいなのとかも、ちょっとできるかなみたいな、自分の中の不安もありつつ、みたいなのが大きかったなと思って。」

学生J「人数が多い班だったので、一番後ろまで声が聞こえてるのかとか、不安だったり、あとボードを一つにしたことで、前の3人とかだけで見ちゃって、後ろまで考えられてるか不安だったので、間にこう2人いたので、間、間に入るようにしたり、工夫はしたんですけど、それでも後ろの子達はちゃんと楽しめてるのかなっていうのは結構不安でした。」

学生K「年下にむけてこう話すっていうのは難しかったし、楽しんでくれるかな、楽しんでくれるかなっていう不安はありました。」

学生L「その、中学生に合わせた問題を作ったりとかが難しかったなと思っていました。あと、本当に楽しんでもらえるかなっていうのも不安でした」

2-②「中学生への配慮」については、学生A・H・Kが語った。以下にそ



の具体を示す。

学生A「みんな仲良かったと思うんですけど、その一瞬だけじゃわからないから。こいつとこいつが仲いいとか、まあなんとなく見える子たちもいるんですけど。割とちょっとみんなから・・・みんなとちょっと距離が置かれているのかなとか、そういうの分かんないまま、ドスドス「じゃあ君と君これやって」っていうのがやっぱり不安だったんです」「じゃあ二人1組組んでって時に、すぐ決めてなかったりとかもあったんで。まあ中学生ってまだすごい俺の中で子どもの方だなと思ってたんですけど。でもやっぱり見えない部分感じ取れない部分っていうのがあるから、これが実際ちょっとみんなと何か共同で作業するときに、すごい、ちょっとですけど、ほんのちょっとでもやりづらさはあったかなって思います」

学生H「前にいた方が元気な班で、後ろにいたのがおしと、おとなしめみたいな、感じだったので、それをどうやってみんなを巻き込むじゃないけど、みんなで話すかっていうのを、は、すごい大変だったなっていう。」

学生K「楽しそうではあったんですけど、気遣ってくれてないかなとか、とかは思いました。」

2-③「準備不足」については、学生A・Hが語った。以下にその具体を示す。

学生A「俺は結構文字起こしとかして、ある程度喋る内容を考えてないと、すって出てこなかったりするんで。それが、ほかの子たちはそこまでやってなかったから、ちょっとあの、バインダーでそのメモを隠しながら、みんなの顔を見ながらしゃべってたから、結構いけてたんですけど、そこのうまく喋れるのかなっていう、特に3年生が、うまく喋れるのかなっていう不安はありましたね」

学生H「結構準備する時間があんまそんな長くなかったけど、準備する量が、クロスワードとか特に多くて結構それは本番でうまくいくのかなっていうのは、結構不安がありました。」

2-④「不測の事態・スケジュール管理」については、学生A・Lが語った。以下にその具体を示す。

学生A「スケジュールがちょっとずれましたよね、一つの班が。そこがすごい困ったことと、あと、この後何するのって言ったら、バーベキューするって言ってたんで、バーベキューも楽しみだろうなと思って。だから、できるだけその、一時間しか食べられなかったらしくてこの後。だからなるべくキリのいいところでどんどんポンポン終わってって、この先の修学旅行も楽しんでほしいなあっていうところで、すごいスケジュール管理が不安でした」

学生L「だいぶ大幅にずれたんで、学内探検の経路とか説明を、どこを省いて簡潔に伝えるかを学生Cさんと一緒にどうしようって考えたりとか、どこを添削してとか、っていうのは困りました（笑）」「スカイラウンジは、説明できる時にして、帰りいけたら、いいよねみたいなのを郡司先生から言われたので、そのタイミングはなかったんですけど、でも説明・っとかクロスワード埋める時に、ちょっと説明、学生Cさんとかがしてくれてたので、で他は、説明がきを添削したりとか、メープルだとジムとプールを周らなかったり、とかでうまくちょっと時間調整。10分とかしか時間なかったんで。添削が大変でした」

2-⑤「ゼミ生との共同」については、学生A・Jが語った。以下にその具体を示す。

学生A「仮にでもリーダーやってたんで自分のことよりも全体のことがすごい気になってました」「あんまり関わりなかったんですけど、でもしっかりとあの学生Cと一緒にメモ取って、例えば発言する部分とかメモを取りながらやってたのが、すごい俺よかったなと思って。そのメモを見ながら実際に進められてたし。少し遅れてた班だったんですけど、このスケジュールリングもしっかり考えて、切るところは、学校探検ちょっと切りながらやってくれてたんで。すごい助かった。あそこ本当何にもトラブルもなく終わったので。実はそこが一番でかいですね。本当やってくれた。まじであれちょっと時間掛かってたらどんどん押して、中学生で飯食べられなかったんで。あそこのハンデでかかったですよ（中略）臨機応変にやってたもう三年生すごいなって思いました。負けてられないなって」

学生 J「全員が意見を出すのって難しいなって思いました。誰かの意見がこう通る、じゃよくなくて一つの企画をみんなで考えるからこそ、けっこうこう気配りしてくれて意見言っていない人に声をかけてくれてる 4 年生もいたんですけどそういうのが結構必要だなと思いました。」

### 3-2-3. 教員としての気づきについて

学生達の語りは次の 4 点にまとまった。3-①「中学生の実態」3-②「理解を促す配慮」3-③「準備と臨機応変な対応」3-④「適切な関わり」である。

3-①「中学生の実態」については、学生 A・L が語った。以下にその具体を示す。

学生 A「最後バスでみんな手振ってくれたりとか、本当に何時間かだけですけど、すごいみんな楽しんでってくれたって、やっぱり子供たちが喜ぶ姿っていうのは改めて教員としてはすごい楽しい部分なんだろうなと。これが三年間とか蓄積すれば卒業するときにすごい成長した姿見て、やってよかったなと思うだろうなあっていうのも思いました」

学生 L「中学生が素直だったなあっていう。すごい。やんちゃそうな子と控えめな子がすごい二分してたんですけど、うちのグループは。だけどやんちゃな子も静かな子もすごい素直だなあって結局。」「やんちゃな子はとりあえず開口一番「やだ」っていうんですけど、「えー」とか。ちょっと、ぶーたれるとか……。って感じだったけど、「まあまあ」みたいに流したら、普通にやってくれるし。楽しそうにしてくれるし、話してたら。」

3-②「理解を促す配慮」については、学生 H・I が語った。以下にその具体を示す。

学生 H「クロスワードとかで特に模造紙に書いてとか、ボードで、一つの班にとか渡したと思うんですけど、中学生がやりやすい方法とか、見やすい・・・もの？とかを作るには、あ、見やすくする？そういう中学生が、こども、見る時に、見やすいなって思ってもらえるものを作るのがすごい大事だっていうふうに個人的に思いました。」

学生I「どうしたら楽しんでもらえるか、っていうのを考えながら動くのって他の人の気持ちってちょっとわからないじゃないですか。全部は。自分的には楽しいけど、これはその年齢だと楽しいのかなとか、そういうことも考えるのは、その教師と生徒の年齢差ってあるから、そこにつながっていくのかなってちょっと思いました。」

3-③「準備と臨機応変な対応」については、学生A・C・K・Lが語った。以下にその具体を示す。

学生A「リハーサルも、リハーサルの、キリないですけど、リハーサルのリハーサルみたいなのがやった方が良さなと思いました。それこそ、どっか修学旅行行くとかもそうですけど、その時もそうですけど、リハーサルがすごい俺の中で、ちょっとリーダーとしてもテンパっちゃって（中略）俺の中でこんな感じで進めていけばいいかなとか思ってたけど、先生が「じゃあここはこうした方がいいんじゃないとか」「いつバインダー渡すの」とかそう言ってくれなかったら、多分、気づかないでそのままどんだん次、どんだん次やってつとところで、すごい俺は甘かったなと思って」

学生C：「みんなの前で、発表するのが嫌だって言ってた子がいて、その子に対して、他の子が言ってくれたりしたんですけど、じゃ私がやってみる？とかを、一言声を掛ければ、そういうこととかも想定しながら、どんな子がいるのかとか、どういう中学生がいるのかっていうのも、もっと前日とかで、どういう中学生がいるかなあとかみんなで話し合えたら」

学生K「想像してた通りにはいかないなっていう。クロスワードもそうだし。こういうのができたらいいよねっていうのと、実際こうするためにはこうしないといけないなっていうのがあるかなっていう」「ペンのダンスとかってしゃべっちゃいけなかったり、でも喋ってたりとか、それは注意の仕方が足りなかったかなとか、っていう臨機応変に対応しなきゃいけないなって。」

学生L「その場その場の対応力とか」

3-④「適切な関わり」については、学生H・I・Jが語った。以下にその

具体を示す。

学生H「二人で話す時に、一人になっちゃった子が一回あって。その時に私がちょっと話しかけたりとかしたんですけど。そういう一人にならないっていう。3人でやっても良かったかなって思うんですけど、そういう一人にならないとか、っていう工夫は、大事かなっていうふうに思いました。」

学生I「中学生同士で話してるタイミングで、話しかけるのがうまくできなくて、歩いてる時に、私がちょっと無言になっちゃって、こうなっているんですか、先導するとかがちょっとうまくできなかったなっているのをすごい思って。こういう時には、事前にみんなが言ったみたいに修学旅行これからどこ行くのとか、そういうことをもっと積極的に自分から話しかけられるようになれたらよかったなってすごい感じました。」「浮いてるわけじゃないけど、他の子とちょっと違うっていったらあれなんですけど、（そういう）子とかにも、こう話しかけられるようにならないといけないのかなっていうのはちょっと感じました。」

学生J「後ろの子までその、気遣い？もうちょっと早くから気づけば、良かったなあっていうのと、もし前で話すとしても、もっと声が大きければ、後ろの子まで聞こえてたかもしれないので、それが気付きでした。」

### 3-2-4. 感想について

当時は教育実習期間中で参加できなかった学生E・F・Gの3名の感想についての語りは、4-①「興味関心と羨ましさ」4-②「共同による達成感と成長」の2点にまとめられた。

4-①「興味関心と羨ましさ」については学生E・F・Gが語った。以下にその具体を示す。

学生E「実習期間中に、リハーサルとかやってんだっていうのは写真だったり、いろんなのわかって、そんなとこまでするんだって、そんな感じになるんだってみたい、進み具合が本当に見てなかったんで、（みんなと）喋ってもないし、あ、こうやって進んでってるんだっていう、で、最後当日の写真がバーって送られてきた時に、ああ、すごい楽しそうだなって思いました」

学生F：「感想を聞いてて、すごい色々、各々学んだことがあるんだ

なって思って、自分もすごい参加したかったなって、（学生Eと）共感です。」

学生G「実習は実習で、ほんとに、その別に、別としてほんとにすごい楽しかったし、学んでたんですけど、こちらのね、共同も、すごい羨ましい。もう一言で言うと、羨ましいです。やりたかったって思って」

4-②「共同による達成感と成長」については学生F・Gが語った。以下にその具体を示す。

学生E「すごいやったった感があるな、みたいな。作り上げた感が」

学生F：「今の、この話し合いの雰囲気を見てて、4年生が少ないのもあるかもしれないけど、すごい活発になったなって。俺らがいない3週間、1ヶ月くらいなくて、今久しぶりに見たらみんな自分をすごい出してるなと思って、みんなすごい素敵な体験だったんだなって思います」

学生G「みんな同じ、α中っていう活動は同じことをしてるけど、その中でも一人一人少しずつ違う学びがあるのも、やっぱ共同の良さなのかなって思って、私がそのいれなかったところで、その3年生ももちろん、4年生が意見が、いいことと言って、いいことというか、アドバイスくれたみたいなのを聞いて、すごい4年生になったんだっていうのも（笑）」

#### 4. 考察

「楽しかったこと・頑張ったことについて」の学生達の語りは、1-①「ゼミ生同士の協力」1-②「中学生との交流」1-③「対象年齢に合致させる工夫」1-④「言葉かけ」の4点にまとまった。また、「不安だったこと・困ったこと」の学生達の語りは、2-①「理解・動機づけへの配慮」2-②「中学生への配慮」2-③「準備不足」2-④「不測の事態・スケジュール管理」2-⑤「ゼミ生との共同」の5点にまとまった。最後に、「教員としての気づきについて」は、3-①「中学生の実態」3-②「理解を促す配慮」3-③「準備と臨機応変な対応」3-④「適切な関わり」の4点にまとまった。これらの学生達の語りの後、感想を述べた3名の学生達の語りは4-①「興味関心と羨ましさ」4-②「共同による達成感と成長」の2点にまとまった。

これらの結果から、本研究が対象とした中大連携における学生の学びについて、「教職員の同僚性を育む場としての中大連携」「受動的な学習者から能

動的な支援者へ」「大学教員の学習環境デザインの必要性」の3つの観点で考察していく。

#### 4-1. 教職員の同僚性を育む場としての中大連携

本研究が対象とした中大連携において、大学生が楽しいと感じる場面は1-②「中学生との交流」に限らず、1-①「ゼミ生同士の協力」における場面でも楽しさを認識する可能性が語りから示された。前提として、3-①「中学生の実態」でまとめられたように、学生達は、実際に中学生に出会い、関わる中で中学生との交流を楽しんでいたことが想定される。学生Aは支援者としてのやりがいを認識する発言を行うまでに至っていた（「これが三年間とか蓄積すれば卒業するときにすごい成長した姿見て、やっててよかったなとか思うだろうなあ」（学生A：3-①「中学生の実態」）。中大連携は、実際の中学生と関わることでできる機会であり、中学生—大学生の人間関係を練習する場として機能するだろう。実際に、1-③「対象年齢に合致させる工夫」1-④「言葉かけ」2-①「理解・動機づけへの配慮」2-②「中学生への配慮」3-②「理解を促す配慮」3-④「適切な関わり」でまとめられたように、学生達は中学生とどのように関わるのかということに焦点を当てて語っていた。教員養成における中大連携を実施することで、中学生との関わり方を学習する機会となりうることは想像に難くない。こうした学習機会だけでなく、本研究では、1-①「ゼミ生同士の協力」2-⑤「ゼミ生との共同」4-②「共同による達成感と成長」といったように、大学生—大学生間の人間関係に着目した語りが特徴的であった。教員は一人で職務をこなすわけではなく、組織的・効果的なチーム支援を実施することが求められており、教職員集団の同僚性（文部科学省, 2022）が職務の基盤となることが強調されている。「教職員が気軽に話ができる、生徒指導実践について困ったときに、同僚教職員やスタッフに相談に乗ってもらえる、改善策や打開策を親身になって考えてもらえる、具体的な助言や助力をしてもらえる等、受容的・支持的・相互扶助の人間関係が形成され、組織として一体的な動きを取れるかどうかが鍵」（文部科学省, 2022）となることから、教員養成の段階で、学び合うことのできる同僚関係を構築する練習として中大連携の実践に可能性があると期待できるだろう。

#### 4-2. 受動的な学習者から能動的な支援者へ

学生達は1-③「対象年齢に合致させる工夫」1-④「言葉かけ」2-①「理解・動機づけへの配慮」2-②「中学生の配慮」3-②「理解を促す配慮」3-④「適



切な関わり」でまとめられたように、中学生の学びの場をどのように支えるのかということに焦点を当てて語っていた。「こういう遊びだからこういうことがわかるんだよ（学生J：1-③「対象年齢に合致させる工夫J）」といったように、学習活動の意図（めあて）を伝えようとしたり、「積極的に話しかけてた（学生A・C：1-④「言葉かけJ）」「一人にならないとか、っていう工夫は、大事な（学生H：3-④「適切な関わりJ）」といったように中学生の安全・安心な「居場所づくり」（文部科学省, 2022）を工夫したり、大学生は受動的な学習者から、能動的に場づくりをする支援者の視点で活動に参加していた可能性が示された。特に、学生Aは教育実習を目前に控え、「みんな仲良かったと思うんですけど、その一瞬だけじゃわからないから。こいつとこいつが仲いいとか、まあなんとなく見える子たちもいるんですけど（中略）見えない部分感じ取れない部分っていうのがあるから、これが実際ちょっとみんなと何か共同で作業するときに、すごい、ちょっとですけど、ほんのちょっとでもやりづらはあった（学生A：2-②「中学生への配慮J）」と語り、中学生に対しての配慮が必要であることを認識していることが想定された。本研究が対象とした中大連携においては、最初の枠組みを教員が設定したものの、最終的には学生らが主体的に企画・運営をすることとなった。彼らにとっては能動的にならざるを得ない必然性のある学習環境であったと考えられる。中大連携においては学生らが主体的にならざるを得ない学習環境をデザインすることで、支援者としての観点を育成し、学校教員の職能につながる関わりの技術を体験・練習できる可能性が期待できるといえる。

#### 4-3. 大学教員の学習環境デザインの必要性

本研究が対象とした中大連携では、筆者を含む大学教員が活動の枠組みや方向性、中学校とのやりとりを主導して行っていた。全体の活動の概要を口頭で伝えていたとはいえ、学生達自身が十分に準備できたといえる環境を事前に設定できていなかった可能性がある。例えば2-③「準備不足」でまとめられたように「俺は結構文字起こしとかして、ある程度喋る内容を考えてないと、すって出てこなかったりするんで。それが、ほかの子たちはそこまでやってなかったから（学生A：2-③「準備不足J）」といった不安や、「準備する量が、クロスワードとか特に多くて結構それは本番でうまくいくのかな（学生H：2-③「準備不足J）」といった不安を認識させるに至った。余裕を持ったスケジュール設定をしていれば、事前に原稿が必要かどうか（原稿がなくても話せるかもしれない可能性を含めて）、教材教具は十分かといっ



た確認を行うことができていただろう。

こうしたことを踏まえて、教員は学生達の適切な足場かけを担う役割であることを自覚する必要がある。2-④「不測の事態・スケジュール管理」でまとめられたように、当日は、中学生5班（6名）が大幅に到着が遅れるというトラブルがあり、その場で学生C・Hと教員とで相談し、活動の調整を行うという事態があった。リーダーの学生Aの「すごい助かった。あそこ本当に何もトラブルもなく終わったので。実はそこが一番でかいですね。本当やってくれた。まじであれちょっと時間掛かってたらどんどん押して、中学生ご飯食べられなかったんで。あそこのハンデでかかったですよ（学生A：2-⑤「ゼミ生との共同」）」という発言が示すように、学生C・Hの調整によって予定通りに終了するに至った。中大連携においては、活動の中継する教員も活動の一部であり、学生達が安心して主体的に活動できるように余裕を持って適切な支えとなる必要があるだろう。

また、「こういうのができたらいいよねっていうのと、実際こうするためにはこうしないといけないなっていうのがあるかな」（学生K：3-③「準備と臨機応変な対応」）」という発言が示すように、頭の中での想定と、頭の中から抜け出した実際の世界は全く異なるものであり、他者と関わることは思い通りにいかないもの（郡司、印刷中）である。こうしたことを踏まえば、即興で他者と共同する練習を教員養成の場で繰り返していく必要があることを伝えていくことも大学教員には求められているといえる。

総じて、4-①「興味関心と羨ましさ」でまとめられたように、教員養成課程の学生が「やってみたい！」と思えるような学びの場づくりをすることが大学教員には求められており、中大連携のような実践はそうした場としての可能性を含んでいることが期待できるだろう。

## 5. 引用参考文献

福岡真郷（2020）中学校と大学との連携による総合的な学習の時間の新たな展開：キャリア発達における大学生モデルの意義について、福岡女子短大紀要85, pp.111-119

郡司菜津美（印刷中）子供と一緒に育つための教職パフォーマンス入門, 北樹出版

井上徳之・濱田知美（2022）大学との連携による中学校でのSTEAM教育の開発-シリーズ授業による探究的学習・発表の指導効果, 中部大学教育研究22, pp.1-11

河上婦志子・鈴木浩（2010）生徒の学び・学生の学び－中大連携の試み－，  
 神奈川大学心理・教育研究論集 26, pp.83-98

Lobman, C&Lundquist, M（2007）Unscripted Learning：Using Improv  
 Activities Across the K-8 Curriculum, Teachers College（キャリア・ロブ  
 マン&マシュー・ルンドクウイストジャパン・オールスターズ（訳）（2016）  
 インプロをすべての教室へ，新曜社）

文部科学省（2017）中学校学習指導要領

文部科学省（2022）生徒指導提要

文部科学省（2023）学校基本調査

文部科学省（2023）中学校・高等学校キャリア教育の手引き

中澤純一（2010）中大連携における協同学習の展開と成果, 協同と教育 (6),  
 pp.152-154

大内里紗（2020）教職実践演習における大学生の省察に関する研究，日本  
 教育心理学会総会発表論文集 62, p.313

大内里紗（2021）中大連携学習支援におけるオンライン方式の導入について，  
 日本教育心理学会総会発表論文集 63, p.445

大内里紗（2022）中大連携学習支援におけるオンライン方式の導入および  
 その改善について，日本教育心理学会総会発表論文集 64, p.395

大内里紗（2023）中大連携による放課後学習支援の事後指導の分析，日本  
 教育心理学会総会発表論文集 65, p.112

太田麻衣子・郡司菜津美・助川晃洋（2024）中大連携によるキャリア教育  
 実践の試み－修学旅行生を世田谷キャンパスに迎えて－，教育学論叢(42),  
 pp.107-114

上野山裕士・永瀬節治（2017）中大連携の効果とあり方に関する一考察：  
 伏虎中学校の閉校にかかる中学生と和歌山大学生との協働的实践を事例に，  
 観光学 17, pp.35-46

緩利誠・若尾良徳・津村公博（2009）中大連携による国際理解教育の試み，  
 浜松学院大学研究論集 (5), pp.83-94

謝辞：本研究にご協力いただいた郡司ゼミの皆様と皆様の共同に深く感謝い  
 たします。